

バヌアツ共和国のサイクロン被災を救援

01



バヌアツ国家災害管理局との医療分科会



被災したポートビラの様子

3月13日に発生したサイクロン「パム」の被害を受けたバヌアツ共和国では、家屋の9割が被害を受け、10万人以上の住民が被災しました。JICAは17日から30日まで国際緊急援助隊（JDR）医療チームを派遣し、現地の病院などを支援するとともに、機材や水、食料を供与しました。

南太平洋に浮かぶバヌアツは、大小83もの島々で構成される島しょ国です。「パム」の影響で離島と連絡が取れず、状況が把握できなくなったことを受けて、現地政府から日本に対し、北部離島の調査支援をはじめとする援助の依頼がありました。

これを受けて、JICAでは16日に調査チーム、17日に医療チームを派遣しました。調査チームは避難所の保健医療や衛生状態の調査を行い、避難者の健康状態や、手洗い場やトイレなどの衛生状態を確認しました。

その後、両チームは合流し、医療

チームとしてバヌアツの首都ポートビラの中央病院を拠点に活動を展開。医師による回診や手術の指導・補助のほか、看護師の手術介助や看護活動、薬剤師による調剤などを行いました。

また、チームの一部は22日から同国北部のペンテコスト島で巡回診療や被害調査を実施。通信網が遮断され、倒木で道路も封鎖されている上、住民の一部は家屋の倒壊により避難所生活を余儀なくされている状況が分かりました。これを受けて、医療チームは島の北部にあるマウナ保健所支所を拠点に診療活動を行ったほか、島内の保健機関9カ所と小学校1カ所を巡回し、医療サービスを提供しました。このうち、ガマルマウア保健所支所では、到着前から多くの患者が列を作って医療チームを待っている状態でした。

14日間の援助活動で、13人のスタッフが増べ約830人に支援を提供しました。

JAXAと衛星観測データ提供に関する協定を締結

02



署名後、握手を交わす広田幸紀JICA企画部長（左）と諒和夫JAXA第一衛星利用ミッション本部事業推進部長

JICAは3月30日、JICA本部において、独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）と、陸域観測技術衛星2号「だいち2号」の観測データの提供に関する協定を締結しました。これにより、JICAが開発途上国で実施する森林保全、防災、水資源管理、地図作成などの事業に、だいち2号の観測データを活用できるようになります。

だいち2号は、世界最大規模の陸域観測技術衛星「だいち」の後継機。昼夜や天気を問わずに鮮明な画像を撮影できることから、災害状況把握、森林観測、海洋観測、資源探査などへの活用が期待されています。

第一弾として、JICAがアフリカ中部の国、ガボンで実施中の技術協力「持続的森林経営に資する国家森林資源インベントリーステム強化プロジェクト」で、だいち2号の観測データを活用して森林の保全を行うっていく方針です。

中央アジア・シンポジウムで田中理事長が基調講演

03



田中理事長が今後の中央アジアを展望

JICAの田中明彦理事長は3月27日、東京大学で開催された「中央アジア・シンポジウム」未来を見据えた中央アジアの今…チャンスとチャレンジ」(外務省、グローバル・フォーラム、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム、ジャパンタイムズの共催)で基調講演を行いました。

同シンポジウムは、中央アジアの地政学的重要性や、日本と中央アジアの協力の可能性に関する討論を通じて、同地域への理解と関心を深めることを目的に開催され、当日は200人以上が集まりました。

田中理事長は、中央アジア諸国が直面する治安・経済面での懸念や社会構造的な課題を指摘し、周辺の大國と協調しながら、地域が持つ潜在力を開花させることがチャンスにつながることを強調。その上で、JICAが「中央アジア+日本」対話を踏まえて、具体的な開発援助に取り組んでいることも紹介しました。